

伊吹山花だより

第63号 (令和4年9月)

上野区：ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

花シーズン最終盤、やっと出番の花たち。

令和4年度も伊吹山ではいろんな花々が迎えてくれました。三合目の獣害防止ネットの中は豊かな植生が戻っていますが、残念ながら山頂では植生回復が一進一退で、それ以外のエリアでは深刻な状況です。皆様方の入山協力金が生態系保全などの貴重な財源です。ご協力に感謝し今後ともよろしくお願いたします。



リンドウ(竜胆)
健胃効果のある苦い根は熊の胆より苦いので竜をつけたのが和名の由来。花は茎の先や上部の葉の腋に鐘形の紫色の花を上向きにつける。茎頂のものは、数個固まってつく。花は晴天の時だけ開く。



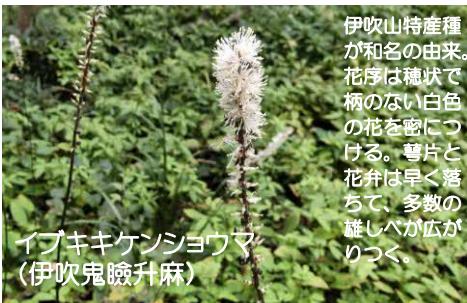
イブキアサミ (伊吹薊)
伊吹山の特産種。茎上部の分岐した枝は長く、葉の幅は広い。頭花はまだらにつく。



センブリ (千振)
全体に強い苦みがあり昔からの胃の薬。千回振り出しても苦みがあるのが和名の由来。花は円錐状で花冠は白色で5深裂し紫色の脈がある。
萩の風センブリの白ちさく揺れ置かれた場所で精一杯に



ヤクモンソウ (益母草)
葉の付け根に数個ずつ花がつき、花色は紫紅色で小さく1cmに満たない。産後の止血に使われたのが和名の由来。別名メハシキ(目弾き)



イブキケンショウマ (伊吹鬼臉升麻)
伊吹山特産種が和名の由来。花序は穂状で柄のない白色の花を密につける。萼片と花弁は早く落ちて、多数の雄しべが広がりつく。



ミツバフウロ (三つ葉風露)
和名は、葉の3深裂する形状に由来する。花色は、淡紫色で花弁と萼片は5枚。節の間が長く、フシダカフウロとも。



イブキトリカブト (伊吹鳥兜)
麗しのイブキトリカブト 気品良く 涙にも似た蕾膨らむ
和名は伊吹山で最初に発見され、花の形が舞楽衣装の鳥兜に似るので。全草有毒で根が猛毒。兜と呼ばれる萼片の中に花弁がある。



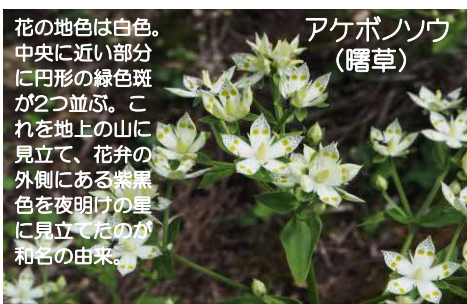
ステゴビル (捨て子蒜)
空の下今にも消えそなた 風は小刻み可憐に揺れる
蒜はノビル、ネギの総称。小さく食用にならず捨て使わないのが和名の由来。20cm程の花茎の先端に5~6個の白色~淡紫色の花をつける。



ツルニンジン (蔓人參)
山友と遂に見つけた 心が躍る
ツルニンジン 心が躍る
萼片は大きく、花冠は釣鐘状で斑点があり、外側は白く、内側は部分的に赤紫色に色づき、下向きに開く。蔓性で根が大きく朝鮮人參に似るのが和名の由来。



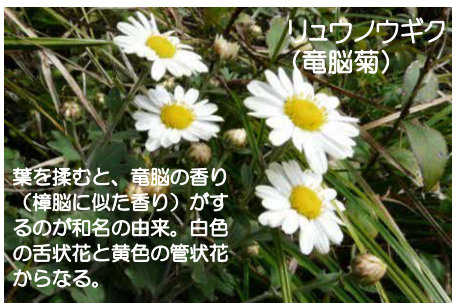
イタチササゲ (鼯ささげ)
花色がイタチの毛色に似、豆果を鼯にササゲたと例えたのが和名の由来。蔓性で他のものに寄りかかり伸び、花は1.5cm程で淡黄色の花。



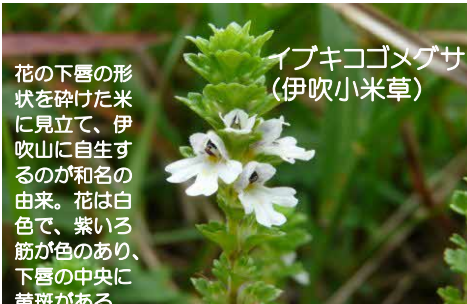
アケボノソウ (曙草)
花の地色は白色。中央に近い部分に円形の緑色斑が2つ並ぶ。これを地上の山に見立て、花弁の外側にある紫黒色を夜明けの星に見立てたのが和名の由来。



キンミズビキ (金水引)
タデ科のミズヒキに花付きが似、花色が黄色なのが和名の由来。花弁・萼片ともに5個で、葉は様々な小葉というバラ科らしい。



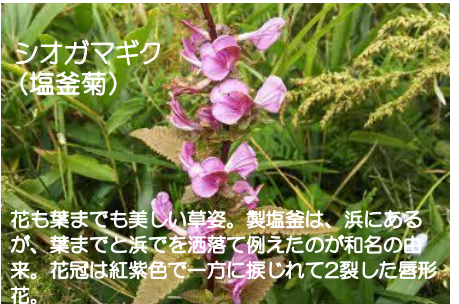
リュウノウギク (竜腦菊)
葉を揉むと、竜腦の香り(樟腦に似た香り)がするのが和名の由来。白色の舌状花と黄色の管状花からなる。



イブキコメグサ (伊吹小米草)
花の下唇の形状を砕けた米に見立て、伊吹山に自生するのが和名の由来。花は白色で、紫い筋があり、下唇の中央に黄斑がある。



アキチョウジ (秋丁字)
和名は花の形が丁の字に見え、秋に咲くから。茎頂部や葉腋部から円錐形の花穂を出し、紫色の唇形花を多数つける。



シオガマグキ (塩釜菊)
花も葉までも美しい草。製塩釜は、浜にあるが、葉までと浜でを洒落て例えたのが和名の由来。花冠は紅紫色で一方に掠れて2裂した唇形花。

7月24日 2022伊吹山ユウスゲまつりを開催しました。

本年度は、みのかもアルプホルンクラブやオカリナ「ルナ・フィオーレ」の皆さんの演奏、伊吹山アドバイザーでNHK百名山の番組でも活躍される山岳雑誌編集者の萩原浩司さんの講演、そして三合目でのユウスゲなど植物観察会の構成で約60名の皆さんにご参加頂きました。数日前の大雨によって三合目がややぬかるんでいたため、観察会以外は山麓の薬草の里文化センター広場で開催し、これに先立って予定していた2回のユウスゲ観察会は大雨で林道が一時的に通行不可となり、残念ながら中止を余儀なくされました。これもシカの食害等によって保水力を失った伊吹山の現実です。



3合目観察会

一夜花のユウスゲ

萩原浩司さん

みのかもアルプホルンクラブの皆さん

コウネユリ

クルマバナ

シュロソウ

ツリガネニンジン

8月21日 8月の植物観察会を開催！

あいにくの小雨の中スタートした8月の観察会。すぐに雨も上がり多くの花に出会えました。雨に濡れた花たちもまた違った風情があります。今回は終了後に、参加者みなで要注意外来生物のブタクサの除去もして頂きました。



まさにミスタマソウ

ブタクサ駆除

イブキボウフウ

イブキセリモドキ

アキカラマツ

シラヤマギク

キセウタ

ハクサンフウロ

ツルボ

タムラソウ

カワラナデシコ

コバキボウシ

オトギリソウ

ノダケ

ニホンジカの食害と大雨によって中腹斜面の土砂流出加速！ 登山道が荒れ、植生が失われて



6～7合目の登山道山側の斜面 2022.8.20

6～7合目間の登山道東側の斜面 2022.8.12

7合目下の斜面荒廃 2022.8.7

2022.8.20 (更に崩壊が進む)

6合目下の登山道補修 2021.10.9

2022.8.20 (大きく崩壊)

くじけそうになる被災が続きますが、登山者の皆さんが伊吹山を楽しんで頂けるよう地元自治会をはじめ関係団体は、登山道補修に取り組んでいます。

5合目の補修 2022.8.20

連載 牧野富太郎博士と伊吹山 その6

「対山館」は、大正14年(1925)に設立されたタイル張りの百草風呂を売り物とした旅館で、薬草や山菜の集荷も行っていました。創業者の高橋七蔵は、明治21年(1888)に上野に生まれました。明治39年伊吹山植物講習会で牧野富太郎との生涯の交友が生まれ、富太郎は対山館を定宿にしました。七蔵が発見したギボウシは、牧野によって「シチソウギボウシ」と命名されています。対山館には昭和14年の富太郎の手紙が伝わり、これにはトリカブトの採集にいきたい旨と、イブキトウキの生木を根付きで5株送ってほしいと記されています。伊吹山の植物が七蔵を介して富太郎の研究に役立てられていたことがわかります。対山館には牧野直筆の「満山薬草香」の横額もあります。このほか、七蔵は「伊吹山植物研究会」の事務局を担っていたようで、対山館所蔵資料のなかには「昭和二年伊吹山植物講習会 入会券」があり、昭和初期に伊吹山植物研究が対山館を拠点にしていたことがわかります。※富太郎の書簡や額はインフォメーションセンターに展示されています。



中央 高橋七蔵(1888-1951) 左 牧野博士



イブキヒメヤマアザミ

今年最後の観察会
9月25日(日)10時開催！
シーズン最後に満を持して開
花する花々が待っています。

伊吹山上部は落石の危険が高く、お互いに気をつけて。

ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

会長 高橋滝治郎 TEL 090-3286-8191
副会長 堀江 寛 TEL 0749-58-1323